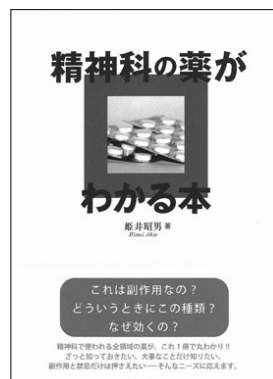


『精神科の薬がわかる本』 ひとの目線を大事にした、 あたらしい薬のガイドブック

著：姫井昭男／208 ページ／2008 年
定価 2,100 円(本体 2,000 円+税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



精神科臨床において、薬物調整は大きな治療目的のひとつであり、臨床の看護師は薬物の作用、副作用を意識しながら観察をしている。

しかし学生は未熟さゆえに、病態や薬理作用と援助の根拠を関連して理解しきれず、ただ「症状」「副作用」「観察ポイント」を呪文のように覚え実習にやってくる。自身の教育の至らなさを実感する瞬間だが、実習が始まってしまうと日課や日常生活を追うのに手一杯となってしまう、結局、治療の根幹まで学びが深まらない場合が多いように思う。

また、精神科薬のほとんどが神経伝達物質に作用するものの、その神経伝達物質をターゲットの部位ごとに採血などの簡便な方法でモニタリングすることは現時点では不可能であるため、「検査データを読む」といった数値を用いた方法で病状の理解ができない。このことは学生にとっての「とっつきにくさ」に繋がっているように思う(ゆえに看護師による観察が重要であり、そこが精神看護のやりがいだと個人的には思うのだが)。さらに、実習の期間が短く、学生が薬物調整による変化に居合わせることは稀であり、このことも理解の難しさの原因となっているのであろう。

『精神科の薬がわかる本』は、『精神看護』誌に掲載された精神科薬についての連載をまとめた本である。精緻になりがちな薬理作用の説明が絶妙

なバランスで執筆されており、個人的な感想で恐縮だが“眠くならない本”であった。観察ポイントとして重要である副作用については、人体イラストを用いて視覚的な説明がされている。実習の繰り返しで疲れている学生の脳にも記憶されやすいだろう。フローチャート式の治療概念図も、病態理解に役立つと思われる。執筆者自身の治療体験がそこここに記されているためか治療の流れがイメージしやすく、「精神科って何をやってるんだろ」という疑問を持つ人に適した一冊と言えるのではないかな。

かと言って、大雑把な説明しかなされてはいないわけではない。特に統合失調症については、病態や症状はもちろん、治療に用いられた薬の歴史まで丁寧に解説されている。他の薬についても読み応えがあった。私はこの本で抗躁薬が日本独自のカテゴリーだと知ったのだが、日本の文化的背景が垣間見えたへん興味深い。ただ、本書では精神科薬に関連したニュースや事件の紹介はなかった。教材として用いる場合、精神科薬の持つ社会的側面については補足が必要のように思う。

服薬した人の目線、服薬した人を観察する人の目線、を大事にした「薬の本」はとても珍しく新しいのではないかな。精神科領域に関連した人間のみならず広く読まれてほしい 1 冊であった。